



文 東郷 隆

第五十五回 「初期の海賊戦法」

アメイ Of JAPAN



絵 上田 信

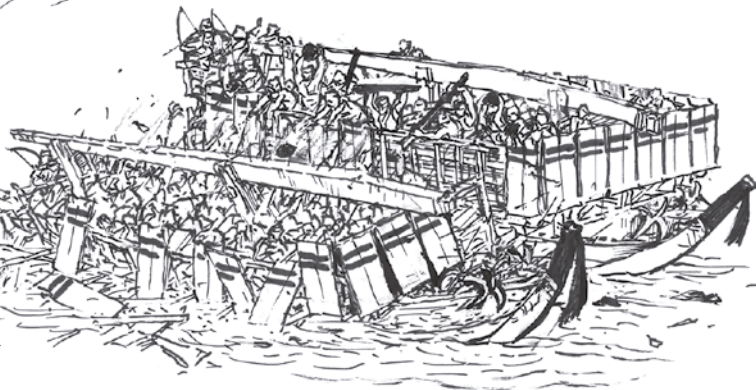
後北条方は、その勢力下にある伊豆から、「カツギ」と呼ばれる海士（潜水専門の男性漁師）を呼び寄せて戦艦に投入した。彼らは得意の潜水技で敵船に接近、鎧武者を水中に引き込んで討ち取った。里見方も房総半島各地から「モグリ」と称する同様な男女を兵船に乗せカツギと戦わせた。まるで映画「サンダーボール作戦」のような光景が、五百年前の江戸湾の底で展開していたのである。

強敵、後北条水軍と戦う里見水軍は劣勢ながら奇策で勝利を収めた。戦国時代の海の戦いには、いまや忘れ去られてしまった兵器や、奇想天外の戦術が目白押しだった。

関船が露出型の桶置きを廃して、密閉式の総矢倉を採用したのも、当初は上部からの石や材木投入を防ぐためであったと思われる。

『里見代々記』に、後北条方は、齧口・熊手・さすまた・搦り掛輪などの長柄道具を「雑入ばら」、つまり普段は漁師などで暮らしている人々に与え、船頭は甲冑を着用していた、とある。すでに水軍の中に、士分とそれを指揮する人々の身分差が生じていたのである。

人形で誘き寄せ、船底に忍ばせた力持ちが岩や材木を投げつける。まるで楠正成の千早城防衛戦に似た奇襲戦法です。この海戦に勝利した里見水軍は、敗兵を追って鎌倉に上陸。鶴ヶ岡八幡宮を焼き払い、近隣で大略奪を行ったあと、す早く安房に撤収しました。陸上の合戦では常に優位に立っていた後北条方も、このゲリラ戦法に呆然として、しばし戦意を喪失したといえます。



古く海に暮らす人々は、「板子一枚、下は地獄」と言い慣わしていましたが、海賊も同様です。目前を航行する「獲物」に襲いかかっても、多くの場合は護衛を同乗させており、海賊の側が逆襲によって全滅することも多かったのです。「今昔物語」にも、商船に弓の達人が一人乗っていたため、破れて逃げる海賊の話が載っています。これは、ただ闇雲に獲物へ斬り込んでいく接舷戦艦が、一種の賭けであることを示しています。

時代が下ると、海賊たちもこうしたりスクを避けるため、地域ごとに特殊な戦法を編み出していきます。今回は、火術（火薬を用いた砲撃や爆発物投擲）が一般化する前の、海戦の実例を述べておきましょう。

大永六年（一五二六）冬、安房の里見水軍は相模国三浦に進攻し、後北条氏の水軍と海上で交戦します。「里見代々記」によれば、この時、三浦半島の城ヶ島東方で待ち構えた後北条方に対し、里見方が日が暮れるまで遠矢を放ち、詞戦などで敵を挑発し続けました。そして日が落ち、「……早やたそがれに及びて色目も分たぬ比になりぬれば、大將、すは時分よきぞ」と配下に用意を命じます。里見の兵は船底に隠れていた土人形を舷側に並べ、戦闘員は身を伏せます。後北条方は急に静まった敵を、憶したと見て船を漕ぎ寄せ、熊手や長柄を突き出して人形を引き落とします。里見方の伏兵は、「時分は今ぞとうかがい見て、大方ども踊り出て、大石材木取りあげ（敵船に）投げ入れれば、船は微塵に打ち破られ、溺れ沈む者おびたし」